

季刊

じぱ

Japan Intellectual Property Association

Special INTERVIEW

高倉 成男 氏 明治大学 専門職大学院
法務研究科長 専任教授

わが社のこだわり

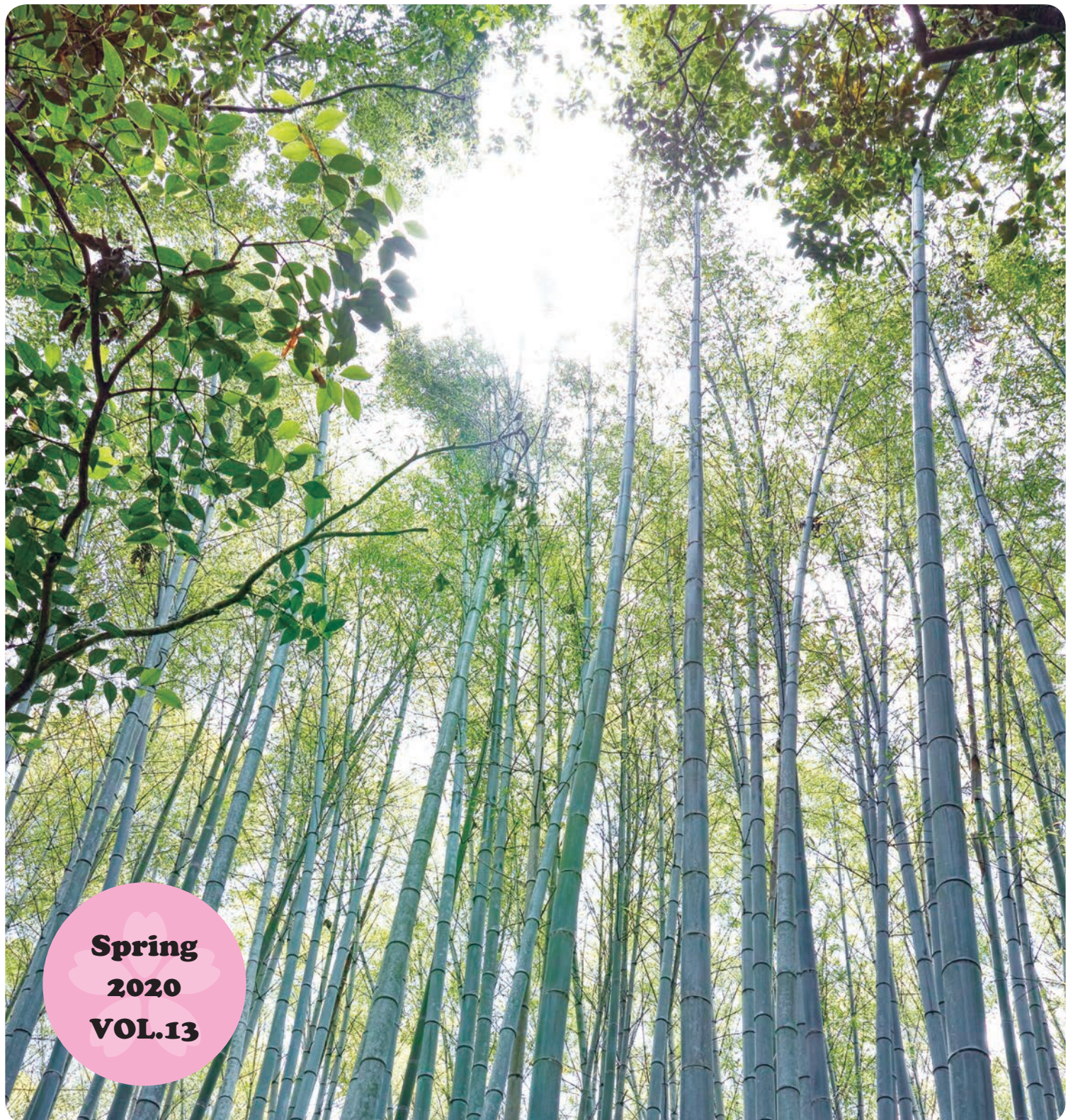
セイコーエプソン株式会社
インクジェットで世の中を変える

ZOOM UP

WIPO プロジェクト

JIPA通信

「知財管理」誌特集号



Spring
2020
VOL.13

政府間交渉で議長もご経験された明治大学高倉教授に
知財の国際ルール作りから人材育成まで多岐にわたり
下川原常務理事がインタビューを行った。

ターニングポイント

下川原 特許庁で在籍中に外務省や内閣府等への出向も含め様々なご経験をされたと思いますが、その中で特に印象に残っていることについて、お聞かせいただけますでしょうか。

高倉 たくさんありますが、1つは、入庁2年目に企業で2週間の実務研修をさせていただいたことですね。書類中心の日々の仕事に疑問を感じ始めていた時期でしたが、企業活動と特許の関係を体感し、知財サイクルにおける特許審査の役割を実感することができました。もう1つは、入庁20年目のときですが、APECの中に知財専門家会合を立ち上げ、2年間、議長を務めたことです。各国の意見を調整することの難しさと楽しさを体験しました。政府間の交渉も最後の決め手は交渉官の人柄や人間関係でした。難しい問題はグレイで終わらせることも解決策です。議長にとっては「沈黙」より「批判」のほうがありがたい。議論が前に進みますから。議長席に座って初めて見えたものがたくさんありました。

ルール作りの留意点

下川原 国際会合の議長ともなると、色々ご苦労があったのですね。今後ますます難しくなる知財の国際ルールまたは国内ルール作りについて、どのような点に留意すべきでしょうか。

高倉 国際ルール作りは価値観の対立が絡むことが多く、一筋縄ではいきません。例えば、公衆衛生と特許の対立。このような問題は「経済より命が大事」あるいは「両者は無関係」といった感情論では解決できません。公衆衛生のために特許をどのような場合にどの程度制限することが全体として最も合理的かをきめ細かくTuning(微調整)することが必要です。このことは国内ルールの形成についても同じです。大局的立場から異なる価値観の調整を根気よく行うことが不可避です。また知財のルール作りの難しさは、例えばデータ保護のあり方のように、先が見えないことにも起因しています。先が見えない時代には、失敗してもやり直しができる範囲の小さな改正を機動的に重ねていくこと(Agility(機敏性))の



Special INTERVIEW No.013

知財の国際競争力の強化のために 産業界とアカデミアは役割を認識し JIPAをハブに政策形成に更なる貢献を

高倉 成男 氏 Shigeo TAKAKURA (写真右)

明治大学 専門職大学院 法務研究科長 専任教授

下川原 郁子 Ikuko SHIMOAWARA (写真左)

日本知的財産協会 常務理事/株式会社東芝 技術企画部 知的財産室長



考え方も重要ではないでしょうか。国内のルール作りも国際競争の時代です。

産業界とアカデミアの役割

下川原 国の知財戦略におけるアカデミアの役割について、お考えを聞かせていただけますでしょうか。

高倉 知財戦略の形成は産業界が「主」となるべきです。アカデミアの役割は「従」です。例えば、立法時の法的整合性チェックなど側面支援、改正後の法律の解釈・運用に関する法的研究等です。法的研究は、紛争の防止に貢献し、また新たな政策提言のための基礎資料を提供します。もう一つの役割は、リカレント教育を含む知財専門家の人材育成です。知財研究と人材育成は産業界とアカデミアが協力して進めるべきでしょう。

知財人材の育成

下川原 これからの企業知財人材の育成について、ご教示いただけますでしょうか。

高倉 時代の流れを読み、業界・自社のビジョンを語れる「大局観」と、規則やガイドラインや判例レベルの「実践知」の双方を備えた知財人材が望まれます。その育成のためには、①主体的学習、②実践への適

用(実践知及び応用力のレベルアップ)、③人事ローテーションによる実践の場の拡充(大局観の涵養)の3つを螺旋的に回すことが必要ではないでしょうか。上司には是非、部下に様々な学習と実践の機会を与え、小さな失敗を許容し、失敗を通じて自ら成長できるように環境を整えてほしいと思います。

JIPAへの期待

下川原 最後に、今後JIPAへ期待することをお話いただけますでしょうか。

高倉 JIPAは既に素晴らしい組織です。世界的に見ても、政策提言と人材育成をこまめ実践している組織は他にありません。強いて今後の期待を挙げるなら、1つは、ASEAN等におけるJIPAのような組織づくりの支援。長い目で見ればJIPAのためになります。もう1つは、データに基づく事後の政策評価。法改正の効果・影響については産業界が検証用データをお持ちです。JIPAがハブとなってエビデンスベースの省察的政策形成を推進していただきたいと思っています。アカデミアとの連携も、引き続きよろしく願いいたします。

わが社のこだわり [セイコーエプソン株式会社]

インクジェットで世の中を変える

小林 利彦 Toshihiko KOBAYASHI

日本知的財産協会 常務理事
セイコーエプソン株式会社 知的財産本部長EPSON
EXCEED YOUR VISION

1942年の創業以来、エプソンは新たな時代を切り開くいくつもの画期的な商品を生み出してきました。1968年には「EPSON」ブランドの由来となった小型軽量デジタルプリンター「EP-101」を、1969年には世界初のクォーツ腕時計を、1994年には家庭での写真印刷を可能としたインクジェットプリンターを生み出してきました。それら商品開発の源泉は創業以来培ってきた「省・小・精の技術」と、創業者山崎久夫のお客様に向き合う姿勢「誠実努力」と、お客様の期待に対し飽くなき「創造と挑戦」を行う社風のDNAです。エプソンは、お客様の期待に応え、「なくてはならない会社」を目指し、新しい時代を創り続けていきます。その一例として現在エプソンが注力しているインクジェットイノベーションについてご紹介します。

マイクロピエゾ技術

インクジェット技術は、超微小なインク滴をメディアに直接飛ばして印刷するので、廃棄物が少なく、アナログ印刷やレーザー方式に比べて環境面や効率面で非常に優れており、また原理的にどんなメディアにも印刷が可能です。

エプソンのマイクロピエゾ技術は、電圧を加えることで収縮するピエゾ素子の機械的な動きによってインク滴を吐出するのが特徴です。このマイクロピエゾ技術がエプソンのあらゆるインクジェットプリンターに共通の技術基盤となっています。

PrecisionCore

当社は、コア技術をブランド化し、お客様にわかりやすく訴求する技術ブランド戦略を展開しています。マイクロピエゾ技術を進化させ、技術ブランド化したのがPrecisionCore(プレジジョンコア)です。



PRECISIONCORE

PrecisionCoreは、エプソンが長年にわたり培ってきたインクジェット技術と最先端のMEMS製造技術とを融合させたテクノロジーのブランド名称です。高精度化と小型化を突き詰めたことで、プリントヘッドの基本性能が飛躍的に向上し、

高速化・高画質化の実現を果たしました。

PrecisionCoreは、幾多の困難を乗り越えて技術の粋を極めることで実現できた、エプソンの技術の結晶と言っても過言ではありません。

インクジェットイノベーション

PrecisionCoreにより、産業印刷機向けのラインヘッドからオフィス向けデスクトッププリンター用ヘッドまで、柔軟で多様なプリントヘッドの構成が可能になりました。

現在、インクジェット技術を使用した印刷方式は、ホームやビジネスの領域だけではなく、商業・産業領域、ディスプレイやエレクトロニクスなどの新しい領域へ急速に拡大しています。エプソンはこれまで商品の企画・設計・製造・販売まで自ら行う垂直統合型ビジネスを基本としてきましたが、私たちにできることには限りがあります。そこで、この多様化するニーズに対して、エプソンは積極的にプリントヘッドの外販を行うことで、よ

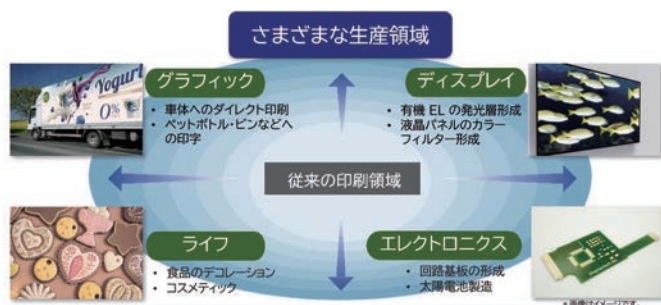
り良い社会を創ろうとする志を同じくするパートナーと共に、オープンイノベーションを起こし、さらにインクジェットの用途を拡大していきます。

エプソンの知財活動

エプソンの知財活動で特徴的なのは、PrecisionCoreに代表されるコア技術を保護する知財権の創出・活用のために、事業戦略を念頭に置いて実務を遂行しようとするプロフェッショナル意識が各々の知財担当者に根付いていることです。そして、実際に取得した知財権を20カ国以上の国で他社侵害品に対して活用することによって、コア技術の保護に努めています。これは、新たな顧客価値につながるコア技術をエプソンの最も重要な資産として位置付け、知財権の活用によりコア技術を守ることが経営戦略上非常に重要と考えているからです。

JIPAへの期待

エプソンの知財担当者のプロフェッショナル意識を醸成するにあたり、JIPAの活動は不可欠なものであり、会員企業としてエプソンも積極的に協力していきたいと考えています。





WIPOと連携し、新たな時代の国際知財制度を考える

令和2年2月20日、世界知的所有権機関(WIPO)のガリ事務局長をJIPA東京事務所にお招きして、意見交換をしました。コロナウイルスに対する懸念による急な変更にも関わらず、予定通り意見交換の場を設けていただき、2時間ほどにわたる密度の濃い議論をすることができました。

会合では、ガリ事務局長より、WIPOの活動に対するJIPAの貢献に感謝が表され、JIPA側も、ガリ事務局長が長年にわたりJIPAシンポジウムへご参加され、ご講演、特別対談などを通して、JIPA会員や日本の知財界へグローバル知的財産制度のフロンティアからのメッセージをお伝えくださったことに改めて敬意をお伝えしました。

WIPOプロジェクトでは、WIPOとの連携を深める様々な活動に取り組んでいます。このプロジェクトは、WIPOとJIPAが共同で立ち上げた環境技術移転メカニズムに取り組んだWIPO GREENプロジェクトが、2015年にWIPOプロジェク

トと衣替えをしたものです。

また、現在、新たなビジョン提言に繋げることも念頭に、データ・AI等最新技術と知財、知財制度の将来像、国際知財問題なども議論しています。これまでもWIPO幹部訪日の機会に意見交換をしたり、WIPOへの講師派遣の議論もしてきました。

WIPOプロジェクトでは、大学の先生にも正式メンバーとして参加していただいています。明治大学法務研究科長高倉成男先生、同大学山内勇先生、ワシントン大学ロースクール竹中俊子先生から、それぞれ、特許庁時代の経験を含めたグローバルなご知見、最新知財論点の経済学視点からの分析、世界中のアカデミア・実務者ネットワークに基づく幅広い視点から

意見をいただいています。

昨年秋のジュネーブでのWIPO総会には、JIPAから私が出席しました。世界百数十カ国の大使・大臣・特許庁長官ら、国際機関やJIPAのような各国NGOの代表などが一堂に会する会議場で、JIPAを代表しての一般演説も行いました。世界中の知財リーダーが集まる総会の期間には、WIPO事務局や各国出席者の間での個別会合も多数行われ、様々な世界の知的財産施策が前進する機会となります。

次期事務局長には、シンガポール知的財産庁長官のダレン・タン氏が選出され、新たなWIPOの時代が始まりますが、WIPOとの連携をより深めることができるようプロジェクト活動をしていきます。



WIPOガリ事務局長(左から6番目)をお迎えして



プロジェクト会合の様子

JIPA通信 「知財管理」誌 特集号

毎年「知財管理」誌4月号は、特集号として会誌広報委員会が全論説を企画して専門家に執筆依頼しています。近年、知財業務は、権利の取得・維持・管理・活用等に加え、データ、顧客とのネットワーク等、知的資産の活用も含みつつあります。このような知財の概念変化に着目し、本年はメインテーマを「“知財”を超える」としました。拡がりゆく“知財”を取り巻く最新事情、海外動向から見える日本の課題や方向性、スタートアップ企業ならではのマインド等、激化する競争の中で日本が勝ち残っていくための有益な情報を取り上げています。ぜひご活用ください。



会誌広報委員会 特集号WG

表紙の写真は…

「竹とエジソン」

株式会社村田製作所
知的財産部 平 浩明

筍は、甘くて歯ごたえがあって、でも柔らかい、春の食材のひとつです。写真は京都の竹の寺 地蔵院の竹ですが、少し離れた石清水八幡宮にはエジソンの竹があります。白熱電球の実用化競争をしていたエジソンは、お土産にもらった扇子をきっかけにフィラメントに竹を使うと発光寿命が延びることを見つけました。最高の竹を探し求めて京都の竹にたどり着き、その後別の材料に置き換えられるまでの十数年、京都の竹がアメリカを明るく照らしました。春の食材を頂きながら発明王の偉業を思い出すのも良いのではないのでしょうか。

本誌では、季節感があり、技術、特許、知財に関連がある表紙写真を募集しています。写真と説明文を会誌広報グループ kikansi@jipa.or.jp宛てにお送りください。また、取り上げて欲しいテーマがあれば、お気軽にご連絡ください。